

「日常」にある交通事故

広島県立広島中学校 二年 高岡 夕愛

朝起きて着替えてご飯を食べて歯磨きをし、家を出る。自転車を漕ぎ、家から二十分くらいの場所にある駅に向かう。いつもと同じような変わらない朝だった。家を出てから十五分くらいのいつもの横断歩道を渡るところだった。車が私のすぐ近くに向かってきたのだ。歩行者の信号は青だったが、車は急ブレーキをし、何事も無かったかのように走り去っていった。右折してきた運転手は自転車に乗る私の存在に気付いていなかったのだろう。幸い何も起こらず、怪我もなかったが、私は交通事故の恐ろしさを知った。いつもと同じような日だったのにいつもとは違うことが起きてとても怖かった。

その二週間くらいして母から、いとこが交通事故で車と接触したと聞いた。いとこはスピードが速いロードバイクという自転車に乗っていたようだった。車に乗っていたのは高齢者の人でゆっくり運転していたようだが、その人の不注意だったそうだ。その時私は背筋が凍るような思いで二週間前のことを思い出した。私がいとこのように事故にあっていたら大怪我をしていたかもしれないし、家族にも迷惑をかけていたかもしれない。いとこは骨折をしなかったけれど、色々なところを怪我していて、足も傷で歩きにくいと言っていた。あと少し車のスピードやいとこの自転車のスピードが速かったらどうなっていたのか。たくさんの「もしも」を考えると、本当に怖かった。そして母と、私自身は事故を起こさないように登校は余裕を持つてすることと、自転車のスピードは出さないこと、必ず横断歩道は車が止まってから渡ることを決めた。

交通事故のニュースを見たり、車がガードレールにぶつかって警察が来ているところなどはよく見るが、自分が危ない目に合ったりいとこが車と接触したりしたのは本当に身近なことではびっくりした。自分は大丈夫という根拠の無い安心のせいで交通事故は一日に何件も起こってしまうのだ。いとこも大事にはならなくて良かったが、交通事故は一瞬で人の命を奪ってしまい、事故が起こってからは遅い。誰もが、慣れたものは初めの時より緊張感を持たずに行動しているはずだ。だから交通事故や不慮の事故は誰にでも起こる、身近な危険なのだ。

私は道路で自転車を使うということに緊張感を持った方がいいことを改めて知って、今後気をつけようと心に決めた。毎日のように自転車を漕いでいる

けれど、ある日突然いつもとは違う出来事が起こるかもしれない。そのため、日常的になっっていることこそ緊張感を持って行動し、身近な人に気をつけて、と注意したいと思った。

それらの出来事があってからは、自転車に乗っている時は信号も注意深く見て、私が加害者にならないように歩行者が近くにいないか、周りをよく見るようにしている。また、自転車に乗って、帰り道別れる友達や友達の家遊びに行く妹などに気をつけてね、と言うようにしている。通学は毎日のようにするが、毎日気を緩めないように自転車を使い、絶対に交通事故は起こさないという心構えでこれからも過ごしていきたい。